

太田 和子 提出 学位申請論文

『近世後期江戸近郊農村地域文化の展開』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、近世後期の江戸近郊農村、特に武蔵国多摩地域における地域文化の展開について、医学・俳諧・狂歌・政治情報・和歌などを受容した人々を対象として、文化活動の実態と内容を分析し、農村文化の多様性を明らかにしようとした研究である。江戸近郊の地域文化の研究は、杉仁氏の俳諧・立花などの研究、岩橋清美氏の歴史意識の研究、菅野則子氏や長田直子氏による在村医療の研究などがあり、また最近では初等教育や蔵書の分析などの研究があるものの、事例も少なくまだ解明されていない分野が多い。それは、戦後研究が蓄積された近世農村の政治・社会経済史研究とは対照的であり、ことに本研究で取り上げる内容は研究が少ない分野である。著者は近世後期の農民生活を研究

していくうえで、政治や社会経済の問題だけでは解明できないと主張する。さらに地域社会を政治・経済・文化の結節点と捉え、地域文化の活動を農民の社会生活の重要な側面と位置づけて、農民生活の多様性を検討しようとしたものである。

本論文は序章と本論五章および終章から構成される。

序章では、研究史と研究対象とする武蔵国多摩地域の特性を論じ、全体の構成を紹介している。

第一章「江戸近郊農村地域文化人の蔵書」では、多摩郡本宿村（府中市）の在村医内藤常明・重喬・重鎮の三代にわたる家の歴史と各代の事績・経済活動の一端と寺子屋活動を検討し、また周辺の寺子屋との比較検討を行っている。さらに内藤家の蔵書を検討し、ことに医書を中心に分析して、古代中国の医学書、元明代の中国医学書、さらに西洋医学の影響を受けた医学書と、蔵書が医学の発展を積み重ねるように形成されていくという過程を見出している。また購入記録の分析を行い、重喬・重鎮それぞれの興味関心の相違も紹介している。

第二章「多摩川中流域の狂歌」では、内藤重喬の俳諧の判者としての活動を記し、その子重英が編纂した『玉川南北俳諧 雅名録』に掲載された俳人を分析し、内藤家を中心とした俳諧のネットワークを検討している。内藤家が居住する府中から甲州道中を西に八王子・日野に多くの俳人がおり、多摩川の南に現在の多摩・町田・川崎市域に広がり、北には国分寺・小平・所沢・飯能市域に散在しているが、江戸寄りの新宿・江戸方面には意外に少ない。ただし判者は江戸が多く、江戸の大島蓼太系と白井烏酔系の判者が権威の源泉になっていたことを示し、俳諧のネットワークが地縁・血縁の強い近隣地域と、多少遠隔でも経済活動が活発な地域であることを明らかにした。内藤重喬は、四方真顔に狂歌も学んで狂歌のネットワークも持っており、筆者は多摩郡内の狂歌の活動実態を『江戸狂歌本選集』全一五巻の中から居住地が確認できた人びとの狂名を抽出し、その実名と生業を確定する作業を行い、青梅・八王子に狂歌人が集中することを確認するとともに、内藤家の記録に狂歌の記事が多いことに注目し、唐衣橋洲など高名な江戸文人との交流も見出している。

第三章「武蔵総社神主家の政治情報収集」では、甲州道中府中宿（府中市）の武蔵総社六所宮の神主猿渡家が、近世後期から幕末期にかけて収集記録した政治情報を分析している。対象となった情報は、幕府の寺社関係の触書、アヘン戦争の記録を含む対外関係、安政の大獄期前後の幕府内情勢、尊王攘夷運動、社会情勢、和歌文学などに関する聞書・法令・記録・文書類などであり、幕末の当主猿渡容盛が四一冊に綴って『反古帖』と名付けている。この情報の入手先は、縁戚の御家人や松江藩士、幕府役人、内藤重英の子内藤重鎮といった地域文化人などで、縁戚や幕府役人からは触書や幕閣の対立など政治関係、地域文化人からはうわさ話や、治安混乱の様子などであった。ただし猿渡家は、毎年正月江戸城に登城し將軍に拝謁するという特別な身分であった。収集したこれらの情報を、猿渡容盛は周囲などに提供しておらず、このことから、情報収集は家の権威保持と、紛争回避や解決、家の安泰を目的としたものであったと論じている。

第四章「武相両国の歌人たち」では、六所宮神主家で近世後期から幕末にか

けて武蔵国・相模国の歌人から寄せられた和歌を、猿渡容盛が編集し上梓した和歌集『類題新竹集』を史料に、武蔵・相模地域の歌人たちの分布を検討している。歌人は神職・国学者・僧侶・学者などが多いが、宿町村の役人などとともに一般庶民も歌人全体の半数近くいることを指摘する。また彼らの居住地が宿場町や城下町などが多いが、武蔵の在村歌人の多くが古代中世に遡る古村に居住し、そこには古代中世の寺院・神社・城跡などがあることから、地域の歌人たちがこうした歴史環境を認識し、和歌に親しんでいたと推論している。また在村の歌人のなかには、村内で自己の権威を高めるために地域の顕彰を行う者や、荷田春満や本居宣長を祭神とした神社を建立し、国学の振興を図る者も出現したことに注目している。

第五章「地域文化人の明治」では、多摩郡国分寺村（国分寺市）名主の子本多 雖軒の生涯を検討している。雖軒は、幕末に在村医に入門し、医学・漢詩文・絵画・書を習得し、明治期には医師・訓導・教導職として新政府の学制や医制に対応しながら、地域の人々の求めに応じて神社の灯笼や祭礼の幟、商店の看板、扁額・

唐紙などに揮毫し、羽織の裏地に山水画を描くなどした人物である。明治に入り人々の生活だけでなく教育制度や医療制度が根本から変わるが、その変化を初期に支えたのが、地域の寺子屋の師匠や、医師、神職・僧侶などの地域文化人たちであったと筆者は主張する。近世には一部の富裕層のみが楽しんだ書画が、明治には庶民の生活にも浸透するが、それを支えたのが近世の地域文化であったとも指摘する。

終章では、江戸近郊農村の地域文化の多様性を生み出した地域特性が、教育環境、歴史的環境、経済環境、支配などの政治環境など、幾つもの要件があることを、各章でそれぞれ指摘したことにより、近世農民生活の多様性の一端を明らかにできたと論じるとともに、今後の課題を掲げている。

論文審査の結果の要旨

本論文の筆者は、長年にわたり近世における江戸近郊農村の研究を続け、特

に近世後期の農間余業と産業の発展など、農民の経済活動と生活の諸相を論じてきた。筆者は、戦後に日本近世史発展の基礎となった農村史研究を続けるなかで、従来研究の中心となっていた政治・社会経済史的な分析だけではなく、農民の教養・文化面を解明しながら地域文化の諸相を検討し、農民生活の多様性を追求しようと大学院に入学した。本論文は、大学院入学後に筆者が史料調査の中で新たな史料を見出し、整理し目録を作成したうえ考察を重ねた研究成果の一端であり、筆者の研究成果のうち地域文化の展開に関わる論考のみであって、研究の全貌を示したものではないことは、審査に際して考慮に入れる必要がある。

本論文の序章では、研究史と研究対象とする武蔵国多摩地域の特性を論じながら、地域文化が階層性や経済圏などの問題と重なり合っていることを指摘しており、本論文の内容だけで地域文化の展開や農民生活の多様性を論じるわけではないという研究姿勢を見る事ができる。

第一章では、多摩郡本宿村（府中市）の在村医内藤家三代にわたる家の歴史・

各代の事績・経済活動の一端と寺子屋活動を検討し、また内藤家の蔵書について医書を中心に分析して、蔵書が医学の発展を積み重ねるように形成されていくという過程を見出している。医書の体系に関する考察はおおむね首肯できる内容であり、また購入記録の紹介は書籍の値段が示され興味深い。

第二章は、内藤家の俳諧・狂歌をめぐるネットワークを分析している。俳諧では、内藤重喬の俳諧判者としての活動、その子重英編纂の『玉川南北俳諧雅名録』に掲載された俳人を分析し、内藤家を中心とした俳諧のネットワークを検討して、街道の宿場・経済圏のあり方に関係していることを論じ、ネットワークが地縁・血縁の強い近隣地域と、多少遠隔でも経済活動が活発な地域であることを明らかにしている。また内藤重喬は狂歌のネットワークも持っており、筆者は多摩郡内の狂歌の活動実態を整理して、青梅・八王子に狂歌人が集中することを確認するとともに、内藤家の記録に狂歌の記事が多いことに注目し、唐衣橘洲など高名な江戸文人との交流も見出している。地道な作業の成果がみえる分析である。

第三章は、府中宿（府中市）の武蔵総社六所宮の神主猿渡家が、近世後期から幕末期にかけて収集記録した政治情報の分析である。対象となったのは、幕末の当主猿渡容盛が多様な情報を四一冊に綴って『反古帖』と名付けた史料である。これらの情報を、縁戚の御家人や松江藩士、幕府役人からは触書や幕閣の対立など政治関係について、地域の在村医である内藤重鎮など地域文化人からはうわさ話や治安混乱の様子を入手していると、多様な情報収集の入手先を整理するとともに、一方で収集した情報を、猿渡容盛が周囲や地域に提供していないと推論する。このことから、猿渡家の情報収集は、家の権威保持と紛争回避や解決、家の安泰を目的としたものであったと論じている。史料の性格について、さらに検討を加える必要があるが、各家が収集した情報が、家のために使用されながら地域に広まるものではないという問題は、神主猿渡家のような特別な家だけではなく、地域文化人にとっても同様と思われる、今後他の地域文化人の情報収集と比較検討できる基礎を提供した論稿と評価できよう。

第四章は、六所宮神主猿渡家に寄せられた和歌を編集した『類題新竹集』を

史料に、武蔵・相模地域の歌人たちの分布を検討し、武蔵・相模の歌人として神職・国学者・僧侶・学者などが多いが、在町などの一般庶民も全体の半数近くいたと指摘している。また彼らの居住地が宿場町や城下町などに多いが、武蔵の在村歌人の多くが古代中世に遡る古村に住居し、古代中世の寺院・神社・城跡などがあることから、在村の歌人たちがこうした歴史環境を認識し、和歌に親しんだと推論している。さらに在村の歌人のなかに、地域の顕彰を行って自己の権威を高める者や、国学四大人を祭神とした神社を建立して国学の振興を図る者も出現したことにも注目している。武蔵国内の神職組織を独自に編成した六所宮猿渡家の地位との関係や、地域の歴史意識の形成や地誌編さんの問題、地域の歌壇の分析などを総合的に検討すると、さらに深い考察が可能であろうが、多摩地域における俳諧ネットワークについての研究は盛んであるのに対し、和歌についての研究はなく貴重な事例の提示といえる。

第五章は、多摩郡国分寺村名主の子本多雖軒の、在村医・訓導・教導職として、また漢詩・書画を愉しんだ地域文化人としての生涯を検討している。明治

に入ると人々の生活だけでなく教育制度や医療制度が根本から変わるが、それだけでなく地域から生活文化の変化を支えたのが地域文化人であったと筆者は主張する。近世には一部の富裕層のみが楽しんだ書画が、明治には庶民の生活にも浸透するが、それを支えたのが近世の地域文化であったとも指摘する。近世の地域文化が、明治以降に地域の人々の生活文化の変化を支え、さらに豊かなものに発展させたという視点は、納得できる論点であり、筆者の研究の方向性、着地点を示したものといえよう。

終章では、江戸近郊農村における地域文化をさまざまな面から検討したことにより、近世農民生活の多様性の一端を明らかにできたことと論じるとともに、今後の課題を掲げている。

以上のように本論文は、近世後期の江戸近郊農村、特に武蔵国多摩地域における地域文化の展開について、医学・俳諧・狂歌・政治情報・和歌などを受容した人々を対象として、文化活動の実態と内容を分析し、農村文化の多様性を明らかにしようとした研究である。殊に従来江戸近郊の地域文化の中で、あま

り触れられていない医学や狂歌、神主家の政治情報、和歌などについて、膨大な史料を調査したうえ、基礎的な分析を積み重ねて整理をした地域文化の基礎情報を多く掲げている。その意味で本論文は、今後の地域文化研究の基礎文献となりうる成果といえる。ただし今後の課題も多く残っている。殊に史料の分析による史実の発見や個別事例の論証、新たな視点の提示は多いが、紹介にとどまり、他地域や他分野との比較検討がない部分もあり、江戸近郊の地域文化の特徴を明確に論じていない点は惜しまれる。しかしながら新たな史料をもとに、基礎的な分析を積み上げて新たな研究分野を切り開いた本論文は、近世の地域文化研究の発展に寄与しうる成果と評価できる。

よって本論文の筆者太田和子は、博士（歴史学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和二年十二月二十七日

主 査

國學院大學教授

根 岸 茂 夫
①

副 査

國學院大學教授

吉 岡 孝
①

副 査

東京大学名誉教授
國學院大學大学院講師

佐 藤 孝 之
①

太田 和子 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士（歴史）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十二月二十七日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	根岸茂夫	印
副査	國學院大學教授	吉岡孝	印
副査	東京大学名誉教授 國學院大學大学院講師	佐藤孝之	印